

G. 入園して、言葉のかずがふえま したか。	男5 : 6 : 4 女10 : 7 : 4
H. 入園して、わるい言葉をおぼえ ましたか。	男2 : 6 : 9 女1 : 5 : 16
I. お宅のお子様が話すわるいとおも うことばをかいで下さい。	ばか (男女共選) 男1おれ、女1 男1地方辯
J. 一般的にみてつかわせたくな いことばの種類をい。	
K. ラジオを好んでききますか。	男4 : 13 : 4 女4 : 7 : 5
L. どんな番組でもききますか。	娘のおばさん、さくら んは太極、幼児の陣面 三太郎等

右の表について云えば(但し、新学期二ヶ月では確定的なもので
はないとおもう) A、は母親が如何に童話教育に重要な位置を占め
ているか、B、C、D、E、F、は童話教育的保育効果であり、同
様、B—Hまでの逆効果または未効果の部分はこれから開拓される
分野であり、I、J、K、L、については幼児の身近な社会から来
る影響について得た二つの結果として、今後どう導いていくかとい
う方向を考える。

保育知識のアチーヴメントテストに就いて

幼稚園教諭或は保育所保育の保育知識の程度を診断するために保
育知識のアチーヴメントテストの原案を作り、これを実施して、そ
の結果より第一表の改定案を得た。

子どもは子どもなりの夢をもっていることは、やはり昔も今もか
わりはなさうだが、子どもは子どもなりの現実の生活が思いの外
生々しいのではあるまいか。実例はそれ、の身近にころがつてい
るとおもう。一般に批判の眼が鋭くなつた。経済的観念を多くもつ
ようになつた等。いいかえれば子どもはごまかせないということだ
である。言葉の種類も実に多種多様でおおかたは成人の会話から得
た成人の言葉をそのまま彼ら自らの日常語に使用している。このこ
とは子どもも成人のことばをそのまま理解できるようになつたとい
うことである。言葉の善悪はとも角として、成人の言葉を使用する
機会が多くなつたことは、幼児の生活にも成人の生活がそれだけ関
心事だということである。

恐れることはない。やがて近い将来、よき社会人となるべき幼児に
美しい夢もあつたままの現実も、たのしい事もくるしい事も、きれ
いなこともきたないことも、幼児の限界に於て出来るだけ多くを与え、
共に話し、共にきき、共に批評し合ひ、生活経験を豊にもたせたい。
幼児の童話は幼児の生活と共にのびるものであり、童話教育は常
に幼児の生活と共にあるものである。

愛育研究所 森 脇 要

このテストは心理学的、教育学的な問題が二二問と、医学的問題
五問と合計二七問よりなつてゐる。この問題数は少く、もつと沢山ほ
しいのであるが、第一案より不適当な問題を除くと二七問しか残ら

なかつた。

各問題は多様選択の形で、五つの選択肢を持ち、其の中一つが正しい答となつてゐる。被験者はこれらの中から一番正しい答を択べば良い訳である。

それを正しい答とするかについては、心理学者、教育学者、医者、保育の指導者達の間に高い一致度のある答のみを択んだ。これらの人々の間に意見の相違のある問題は改定の時にこれを排除した。

これを幼稚園教諭或は保育所保育母の養成機関四ヶ所に於いて、各々其の最高学年の三学期の終りに於いてこのテストの標準化を試みた。これは最高学年の三学期の終りに於いては、幼稚園教諭或は保育母としての最低の知識が少くとも保持されていると考えたからである。検査を実施した学校は、修業年限は二ヶ年が三校、一ヶ年が一校である。被験者の人数は合計八二名である。

検査結果は、平均が一七・九七、標準偏差三・〇六八六となる。この標準偏差で検査成績を五段階に品等し、各段階に於ける人数、%、並に理想的分布に於ける%を表示すれば第二表の如くなる。

第二表

点数		人数	%	理想% 理想%
13点以下	最劣	5	6.09	7
14—16	劣	20	24.39	24
17—19	普	28	34.14	38
20—22	優	24	29.26	24
23点以上	最優	5	6.01	7

第二表によれば、この検査の被験者達の分布は、稍標準の分布に近い事がこれに依つて知られ、それ故に充分個人差を弁別出来る事を示している。

次にこの検査が保育母学校に於いて教えられる保育知識を充分測定しているかどうかを見るために女子の高等学校の

三年生と比較して見た。高等学校の三年生についても第三学期の終りにこれを実施した。この結果は平均一二・九〇、標準偏差二・四七〇二となり、幼稚園教諭或は保育母の学校の生徒との差は、五・〇七となる。差の信頼度を求めるならば第三表の如くなり、この差は充分信頼出来る。高等学校の生徒の平均は、第二表の段階に於いては最低の段階にあり、したがつて此の検査は幼稚園教諭或は保育母学校においてあたえられる保育の知識を充分測定していると言えると思ふ。

第三表

差	17.97—12.9=5.07
σd	=0.3991
$\frac{D}{\sigma d}$	=13.5783

次に保育母学校出身の児童福祉法に於ける現任保育母一一八名につき実施した所、其の平均は一六・五四、標準偏差三・三五八一となり、幼稚園教諭或は保育母の学校の最終学年生の成績よりも低い。その差並に信頼度を表示すれば第四表の如くなる。

そして、この結果は統計的に信頼出来る故、保育母学校出身の現任保育母の方が保育の知識が幾分低いと言へると思ふ。

この差は何故生じたかについては、色々に考えられるが、まだ結論を下す程材料が存在しない故、結論を下さない方が安全であると思ふ。次に現任の保育所保育母の中、保育母学校出身者と、女学校出身者(試験其の他により資格をつつたもの)を比較して見ると、女学校出身者の平均は二五・七五、標準偏差一・八一〇となり、其の差並に差の信頼度を求めると第五表の如くなる。

第四表

差	17.97—16.54=1.43
σd	=0.4586
$\frac{D}{\sigma d}$	=3.6092

第五表

差	16.54-15.75=0.78
σd	=0.34998
$\frac{D}{\sigma d}$	=2.225

第五表によればその差は少いが先ず統計的に信頼出来る。この差の少い理由は保母試験や其の他の講習会で女学校出身者が保育の勉強をし、知識を高めているためかもしれない。

次に保育に従事している事が、保育の知識と如何なる関係を持つてであろうか。常識的には経験年数の増加と共に、保育の技術に保育の知識は増加すると考えられるのであるが事実はどうであらうか。

先ず経験年数と保育知識の相関を現任保母について求めてみると第六表の如き結果が生ずる。

第六表

保母学校の卒業生	$r=0.0776$
女学校	$r=-0.0427$
全体	$r=0.0008$

第六表の結果から見れば経験年数と保育知識とは大して関係がない。即ち長く保母をしているという事は必ずしも保育知識の増加を意味しないという事が云える。

併し、保母の就職の年限は特種の人を除けば大体に於いて短かく、三年以内で結婚其の他の理由でやめる事が多い故に年限を三年に限つて、経験年数と保育知識の相関を求めて見ると第七表を得る。

第七表に依れば保母学校出身者については、経験年数三年以内の者については、若干の保育知識の増加が見られる。

即ち経験が保育知識の増加に役立っている。しかるに女学校卒業者については負の相関であつて、経験年数の増加と共に、保育

第七表

保母学校出身者	$r=0.2771$	PE	$r=0.0710$
女学校	$r=-0.2778$	"	$=0.0618$
全体	$r=-0.0091$	"	$=0.0504$

知識が少しづつ低下して行く事を示している。

これは保育の基礎教養をあたえられている保母学校出身者は保育の経験を生かして保育の知識を高める能力があるに反して、女学校出身者は、基礎教養の不足のために経験を生かして保育知識を高める事が出来ず、就職の始めに持つていた保育の知識が年々に減少して行く事を示している。

これを概括すれば、経験年数は保育知識に關する限り大して高める事にならない。それ故一年に一回ぐらゐは講習会其の他の再教育の機関を利用し、保育知識の向上につとめる事が何よりも大切であるという事を示している。